

複合語における解釈の問題についての考察

01E004 荒井 洋 一

1. はじめに

形態論は言語学の一分野で、ある語がどのような要素を持ちどのように構成されているか、また語の構造にどのような規則がみられるかなどを扱う。英語には-ingや-edを付け加えられた形のもの、二つの語が合わさってできたもの、イニシャルのようにあらわされたものなど、さまざまなタイプの語が存在する。本稿では、はじめに語形成に関する概念、形成のされ方を簡単にまとめる。そして、その中のひとつのプロセスである複合語について詳しく見ていくことにする。

2. 語形成

2.1 語形成の概念

語形成(word-formation)は、語がどのように形成されているのかを明らかにするものであるが、英語の語形成に関してみていくとさまざまな方法で各々の語ができていくことがわかる。以下の例をみてみよう。

(1) a. employee	b. apartment building	c. chair
inventor	greenhouse	neighbor
inability	team manager	matter
meaningless	truck driver	brow

(Plag 2003: 10)

(1a)は、より小さな個々の要素が組み合わされてできているといえる。employeeは動詞のemployに-eeが付け加えられることで動詞が名詞化されて、新たな語を形成していると考えられることができるし、inabilityはableという形容詞にin-と-ityがついて名詞が形成されている。(1b)では、例えばapartment buildingはapartmentとbuildingの二つの語からできているし、greenhouseはgreenとhouseの二つの語からできているといえる（これらが後に詳しく見ていく複合語である）。

このように語を形成している要素の一つ一つを形態素(morpheme)と呼ぶ。(1c)に関していえば、これらはこれ以上意味を持つ小さな単位に分けることができないので、ひとつの形態素から成っているということになる。形態素のなかの-ee, -or, -lessなどは他の形態素に付いて人を表したり品詞を変えたり否定の意味を加えたりと文法的にも意味的にも役割を持っている形態素であるが、それ単独で現れることはなく、(1a)のそれぞれの例のように動詞や名詞を伴うことが普通である。このようにそれだけで現れない形態素は、拘束形態素(bound morpheme)と呼ばれる。これに対し、employやinventなどのようにそれ一つで独立して現れることのできる形態素は、自由形態素(free morpheme)と呼ばれる。この点から、複合語は二つ以上の自由形態素

により形成されているということが出来る。(ただし後に見るように、拘束形態素が複合語の中にはいるものもある。)

拘束形態素はその特徴から、基準となる語(base, stem)の前後に現れる。その語の前に現れる形態素は接頭語(prefix)、後ろに現れるものは接尾辞(suffix)と呼ばれ、この2つはまとめて接辞(affix)と呼ばれる。-ee, -or, -lessなどと似た形態素に、複数を表す-(e)sや過去を表す-edがある。これを(1)の例と同じように考えると、問題がでてくる。次の例を見てみよう。

- (2) a. The police searched the house.
b. The police are searching the missing child.
c. A searchlight passed across the sky.

上の3つの文はいずれもsearchという形態素を含んでいる。(2c)は複合語であるので、それぞれの要素が組み合わさり新たな語を生み出しているといえるが、(2a)-(2b)のsearched, searchingは統語的なルールに従って変化している。これは-ee, -or, -lessなどの要素のように、それ単独では現れることがなく、また動詞などに伴い意味を付け加えているという点では共通だが、文法的な役割を果たしているだけで、新しい語を生み出しているとは言えない。そこでこれらを明確に分類し、文法的範疇の影響により形を変えるものを屈折(inflexion)と呼び、-ee, -or, -lessなど新しい語を作るものを派生(derivation)と呼び区別している。

2.2 その他の語形成

語形成は屈折・派生、複合以外にも様々な方法でなされる。以下ではそれらを簡単に紹介する。

①転換(conversion)

屈折や派生のように何かを付け足すことをせずに品詞を変えてしまうプロセスである。たとえば名詞のwaterは、水を与えるという意味で動詞としても機能する⁽¹⁾。

- (i) Father drinks a glass of water every morning. (名詞)
(ii) I water the lawn almost everyday. (動詞)

②省略(clipping)

何かを付け加えるのとは逆に、名詞などの一部を削除して新しい語を作るプロセスである。個人の名前に関するものもあれば、それ以外のものもある。

Aaron→Ron	Elizabeth→Liz	Michael→Mike
condominium→condo	demonstration→demo	laboratory→lab

親密さやかわいらしさを表すため省略と接辞の両方の特徴を含んだプロセスも経た語もある。

Amanda→Mandy	Charles→Charlie	Roberta→Robbie
--------------	-----------------	----------------

(Plag 2003: 13)

③頭文字(acronym)

名称を表す句の語頭の文字により新語が作られるプロセスである。文字の発音を続けるも

のと、一語のように発音されるものがある。

(文字のように発音を続けるもの)

(i) British Broadcasting Corporation→B.B.C.

(ii) Federal Bureau of Investigation→FBI

(一語のように発音されるもの)

(iii) the North Atlantic Treaty Organization→NATO

(iv) the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization→UNESCO

(竝木 1985: 168)

④混成(blending)

複数の語から、形態素とは明確に分析できないような部分を組み合わせ新しい語を作るプロセスである。

(i) smoke+fog = smog (スモッグ)

(ii) motor+hotel = motel (モーテル)

(iii) Japanese+English = Japlish, Janglish (和製英語)

(大石 1988: 231)

⑤逆形成(back-formation)

派生を元に戻して接辞とされるものを基体から削除するプロセスである。その結果生み出されるものは動詞が多い。

burglar→burgle—強盗する

editor→edit—編集する

enthusiasm→enthuse—熱狂する

(大石 1988: 220)

このほかにも語形成は様々な方法があるが、以上が主なものである⁽²⁾。以下では先にも例を挙げた複合語について詳しく見ていくことにする。

3. 複合語

3.1 複合語の特徴

複合語とはそもそもどのような語のことを言うのだろうか。先にも例を挙げたが、もう一度別の例を挙げてみることにする。

(3) homework blood test haircut self-destruction rope-dancing

dressmaking homecoming night-flying toy factory sugar beet

(桜井・竹井 1985: 203)

上の例を見る限り、複合語は2つの語が合わせられた語であると言いきそうである。しかしながら、例えばvacuum cleaner salesman trainee helper (大石 1988: 90)のように、3つ以上の語から成っているものも複合語と分類される。つまり複合語とは「独立して現れることのできる語を2つ以上並列してより大きな語を形成している語」といえそうである。しかしここで

問題となることは、複合語とそれに対応する句をどのように区別するのかということである。(4)で見るように、特に形容詞＋名詞の複合語は英語の基本的修飾構造と同じ形をしているので、名詞句と複合語を見分けるのが難しい。

(4) 名詞複合語	名詞句
blackboard (黒板)	a black board (黒い板)
greenhouse (温室)	a green house (緑の家)
darkroom (暗室)	a dark room (暗い部屋)

(3)から、ハイフンがあることや語と語の間にスペースのないことが複合語の条件であるとは言いがたい。ハイフンやスペースが入るかどうかは各複合語によって決まっています、アメリカではスペースを用いない書き方、イギリスではスペースを用いる書き方が好まれているなどということもあるので、いずれにせよ複合語か否かを決定する決め手にはならない。複合語すべてに共通する基準は見当たらないが、以下では複合語とそれに対応する句の特徴を挙げてみることにする。

複合語に見られる特徴の一つ目は、句とは異なり、語彙化しているということである。語彙化とはその語の意味がその構成要素から直接導き出されるわけではないということである。(4)のdarkroomを例にとって説明すると、これは句であるa dark roomとは意味的に異なる。句の場合「暗い部屋」というそのままの意味になるが、複合語であるdarkroomは、単に「暗い部屋」を示すのではなく、「写真の現像などをするための暗い部屋」であり、またいつも暗い状態にある必要がない。つまり全体の意味が部分の意味から論理的に推測できない場合には複合語であるといえる。Fabb(1998: 66)では、複合語では要素に似た意味を持つが、一定の制限が加えられていると指摘している。

複合語の二つ目の特徴は、句とは異なる強勢を持つということである。(4)の複合語では一番はじめの要素(つまりblack, green, dark)に一番強い強勢が置かれる。しかしそれぞれに対応する句の場合では、後ろの要素に強勢がおかれる。このことは多くの複合語に対して言えることだが、すべての複合語がこの特徴を持っているわけではない。以下は第二要素に強勢が置かれる複合語の例である。

(5) geologist-astronomer	scholar-activist
the Boston marathon	aluminum foil silk tie
Shakespeare sonnet	a Mahler symphony

(Plag 2003: 138)

三つ目の特徴は、形態論の操作を受けるものは複合語であるということである。接辞の拘束形態素は、boyishの-ishやunkindnessの-nessのように、単独で現れずほかの語に伴うものであるから、それが付くものは句ではないということだ。pickpocket-hood (すりであること)、bathroomless (浴室のない)がその例である。さらの大石(1988)ではveryの修飾を受けるか、比較級の形をとることができるか、述語の位置におきなおすことができるかというふうな、第一要素が統語上単独のものとして切り離せないものは複合語であるということを述べている。以下

の例ではsmall talkが複合語、wet dayが句であるということにある。

(6) *very small talk	very wet day
*smaller talk	wetter day
*the talk is small	the day is wet

(大石 1988: 80)

以上を竝木(1985)では次のようにまとめている。

複合語としての三つの基準

- ①意味に関する基準—2つ(以上)の語がまとまりをなすとき、全体の意味が部分の意味から論理的に推測できない場合は複合語である。
- ②音韻に関する基準—2つの語がまとまりをなすとき、第一強勢が最初の語に置かれ、第二強勢が二番目の語に置かれる場合は複合語である。
- ③形態に関する基準—2つの語がまとまりをなすとき、両者の間にほかの要素を入れられない場合や、最初の語に修飾語がつけられない場合は複合語である。

またRoepel & Siegel(1978: 219)では、句構造により作られている語のそれぞれの要素は独立して現れることができるが、動詞由来複合語では独立して現れない語も含むことが多くある、と指摘している。

(7) heart breaker	& breaker
church-goer	& goer
sword-swallower	& swallower
money-changer	& changer

(&は可能だが、実在しない語であることを示す)

3.2 複合語の構造

3.1でも述べたように、複合語の中には2つ以上の語からなっているものもある。しかしながらそれらの複合語でも2つの要素からなっているということができる。先にも挙げたvacuum cleaner salesman trainee helperの場合ではhelper以前の要素はすべてをhelper修飾しているものである。別の例としてuniversity teaching award committee member(Plag 2003: 133)という語をあげることができるが、これについても同じ説明が可能である。さらにこの複合語にtrainingという語を付け加え、university teaching award committee member trainingという複合語を作ることでも可能であるが、その場合においても、training以前の要素はすべてそれを修飾している構造をしている(日本語の例としては「野党四党国会対策委員長会議」(竝木 1985: 81)などが挙げられる)。このように後ろに要素を付け加えていくことができることは名詞複合語の特徴であるといえるが、長くなればなるほど理解されにくくなるので頻繁に現れることはない。いずれにせよ、どんな複合語でも主要部(修飾を受ける要素)と補足部(修飾をする要素)の2要素に分けることができるということである。

便宜上、主要部をX、補足部をxとすると、合成語(複合語、派生語)では、xX, Xx, XX, xxの組み合わせが考えられる。大部分の複合語においては、主要部は右側、補足部は左側に現れる。したがってのxXの組み合わせが一番多いということになる。このことは日本語についても当てはまることで(たとえば「学籍番号」「色鉛筆」「専門学校」ではそれぞれ「番号」「鉛筆」「学校」が主要部である)、英語においても実例がもっとも多い組み合わせである。ベトナム語、フランス語などにおいては、左側に主要部が現れることが多いようである(Fabb 1998: 67)。

3.3 右側主要部の規則

上でも述べたように、大部分の複合語はxX(補足部+主要部)の組み合わせが最も多い。主要部はheadと呼ばれるが、複合語はheadから意味的・形態的要素を受け継ぐ。このことは右側主要部の原理(Right-hand Head Rule)と呼ばれ、複合語の重要な特徴の一つである。rattlesnake, homesickという複合語を取り上げて説明してみる。rattlesnakeの主要部はsnakeであるので、rattlesnakeの指すものはsnakeの一種であり、品詞もsnakeと同じ名詞となる。homesickについても同じことが言える。つまりhomesickはsickの一種であり、複合語全体の主要部は品詞(形容詞)と一致する。しかしながら3.4で述べるように、xXの構造をとっていても主要部から意味的・形態的要素を受け継がないものもある。

3.4 内心複合語と外心複合語

大部分の複合語は主要部(head)から意味的・形態的な性質を受け継ぐわけだが、いくらかのものはそのようにならない。以下の例を見てみることにしよう。

- (8) a. laser pointer book cover letter head
b. redcoat cutthroat gadabout pickpocket

(Plag 2003: 145)

(8a)-(8b)のどちらの例もxX(補足部+主要部)という構造をしている。(8a)では主要部から、主要部から意味的・形態的性質を受け継いでいるといえる⁽³⁾。しかし(8b)では主要部から形態的要素は受け継いでいるものの、意味的要素はまったく受け継いでいない。たとえばredcoatという語は、「赤いコート」という意味ではなく、米国独立戦争に赤い服を着ていた英国兵の特徴を指して「英国兵」を表す語になったという(大石 1988: 77)。またcutthroat(殺し屋)の場合も同じで、これはのthroat(のど)の一種ではなく人を表す。(8a)のように主要部から意味的・形態的要素を受けつぐ複合語は内心構造をもっているので、内心複合語(endocentric compound)と呼ばれる。これに対し(8b)のようにその性質を引き継がない複合語は外心構造を持つので、外心複合語(exocentric compound)と呼ばれる。複合語では外心構造をもつものよりも、内心構造を持つものの方がはるかに多い。

外心複合語の中には、ある特徴を引き合いに出して、そのもの全体を指す複合名詞がある。それらは特に異機能複合語(bahuvrihi)と呼ばれる。この複合語の構造は名詞+名詞、形容詞+名詞の組み合わせが考えられる。

- (9) lionheart(勇敢な人) baby face(童顔の人) egghead(インテリ)

birdbrain (うすのろ) potberry (太鼓腹らの人) highbrow (知識人)

(成田 1983: 147)

内心構造、外心構造に関して竝木(1985)では以下のことを指摘している。

- (10) a. *a book to modern linguistics
b. a guide to modern linguistics
c. a guidebook to modern linguistics

(竝木 1985: 151)

(10a)-(10b)が示していることは、guideという語は補部としてtoで導かれる前置詞句を取ることができるが、bookはtoで導かれる前置詞句をとることができないということである。しかしながら両者が組み合わされてguidebookという複合語をとると、主要部がbookであるにも関わらず、統語的には非主要部(補足部)であるguideの性質を引き継いでいるということである。つまりこの場合、複合語全体の補部の選択には複合語の左側の要素が関係しているということになる。この例では主要部のbookは意味的にはあまり重要ではなく、guideという補足部の意味から語全体の意味が推測されると考えることができる。このように、形態的・統語的には修飾部でありながら、意味的には主要部として働く複合語の左側の要素は副主要部と呼ばれている。

3.5 複合語の複数形

次に複合語の複数形について触れておきたい。複合語では、第一要素(左側の要素)が複数の意味を表すものがきても、形態的には単数の名詞として表れることが多い。

- (11) a. mouse-trap (ネズミ捕り器) *mice-trap
b. foot-water (足温器) *feet-water
- (12) 数詞とともに現れる例
a. three-volume novels (三巻からなる小説)
b. a five-act tragedy (五幕からなる悲劇)
c. a five pound note (5ポンドの札)
- (13) 普段は必ず複数形で現れるものが単数形になる例
a. scissor-handle (ハサミの柄)
b. trouser-leg (ズボンの脚の部分)
c. pant-leg (ズボンの脚の部分)

第一要素に複数形が現れるものは、単数形と複数形とで意味が異なる場合、品詞の違いがsの有無によって生じ、形容詞と紛らわしくなる場合などである。

- (14) 複数形独特の意味を持つ場合
a. arms merchant (武器商人)
b. cloths brush (洋服ブラシ)

- (15) あいまい性を除く場合
 a. the seconds-hand of a watch (時計の秒針)
 second-hand (中古の)
 b. plainsman (平原の住民、平原児)
 a plain man (平凡な人)
- (16) 複数形を強調したい場合
 a. programs coordinator (複数の番組の責任者)
 b. private schools catalogue (複数の私立学校の要覧)
- (17) 複数の意識が強い場合
 a. teeth ridge (歯ぐき)
 b. lice-infested (シラミにたかられた)

(大石 1988: 110-112)

3.6 動詞由来複合と語根複合語

ここでは複合語の形成のされ方を見ていく。複合語はその構造から①動詞由来複合語(verbal compound)と②語根複合語(root compound)とに分けることができる。研究者によっては前者を総合的複合語(synthetic compound)と呼び、後者を主要複合語(primary compound)と呼ぶことがある。

動詞由来複合語とは、その主要部が動詞から派生したものである⁽⁴⁾。動詞の要素を持っているために、動詞に関連した意味関係により説明される。またその意味も語と語の関係から予想しやすい。

これに対し語根複合語とは、主要部が動詞から派生したのではないものである。動詞の要素を持たないため、各要素の結びつきが意味素性の相互関係によって決まる。また先に挙げたような外心複合語、異機能複合語などを含むため、意味の予想が困難になる場合が出てくる。そのため学習者は一つ一つの語を覚えなくてはならない。

語根複合語は、許される複合語の型に従ってさえいればどのような語根複合語も可能となるが、動詞由来複合語では可能なものと不可能なものに分けられ、不可能なものはいかなる場面、文脈においても認められないという特徴がある。

- | | | |
|------|-------------------------|------------------------------|
| (18) | 動詞由来複合語 | 語根複合語 |
| | truck driver (トラックの運転手) | truck-man (トラックを運転する人、など) |
| | coffee grower (コーヒー栽培者) | coffee-shop (コーヒーを買うための店、など) |

語根複合語では要素の結びつきが意味素性の相互関係によって決まるので、複数の解釈が可能になる⁽⁵⁾。

3.6.1 動詞由来複合語

動詞由来複合語は極めて生産的である。Roeper & Siegel(1978)では、動詞由来複合語は語根複合語とはまったく異なったプロセスにより作り出されるという立場をとっている。そのプロセスで第一姉妹の原理(First Sister Principle)という制限を受けることを提案している。以下の例を

用いてそれを説明している。

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| (19) a * peace-thinking | (20) a * She thinks peace. |
| b peace making | b she makes peace. |
| c quick(ly)-thinking | c She thinks quickly. |
| d * quick-making | d * She makes quickly. |
| e * life-falling snow | e * It falls life. |
| f life-supporting trees | f It supports life. |
| g fast-falling snow | g It falls fast. |
| h * fast-supporting snow | h * It supports fast. |

(Roeper & Siegel 1978: 208)

(19a)-(19h)の複合語は(20a)-(20h)に対応する。(20a)(20d)(20e)(20h)が誤りなのはthink, fallがとる下位範疇化の枠を考えればわかる⁽⁶⁾。以下はmake, support, think, fallがどのような下位範疇化の枠を取るかを示している。

- (21) make, support {NP} ({ADP}) etc.
 think, fall ({ADV}) etc.

つまりmake類は直接目的語として名詞句を必ず取らなくてはならず、think類はその逆に直接目的語は取れないということである。(20a)(20d)(20e)(20h)が認められないのはその条件を満たしていないからである。(19)と(20)を照らし合わせてみると、非文法的な文から作り出された複合語はどれも認められないということがわかる。つまり動詞由来複合語は文法規則に基づいて作られているわけである。このことを前提に、動詞由来複合語の形成に関して以下の原理をあげている。

(22) 第一姉妹の原理 (First Sister Principle)

すべての動詞由来複合語は動詞の第一姉妹にある語を編入することで形成される。

動詞の第一姉妹の位置に生じる語というのは、動詞句という共通の母接点を持ち、動詞のすぐ右側に生じている要素である。つまり動詞のすぐ右側にある要素が動詞の前に出て複合語を形成するということである⁽⁷⁾。この原理に従えば、名詞以外に形容詞や副詞を編入して複合語を形成することができる。

- (23) snappy-looking(look snappy) funny-looking(look funny)
 slow-worker(work slow) late-bloomer(bloom late)

第一姉妹の原理の特徴の一つは、この原理が働くのは語レベルでのみであるということである。つまり文法的に正しい文から複合語を形成する場合でも、句や文を第一姉妹として編入して複合語を形成することはできない。例えばmake[some dark coffee]という句から[some dark

coffee] makingという複合語を作ることはいできないし、We think it's a shame.という文からit's-a-shame-thinkerという複合語は作れないということである(Roeper & Sigel 1978: 213)。このことは解釈の点でも有効である。例えばold church-goerという複合語は、go to the old churchからold churchとという句が編入したとは考えられず、go to the churchからchurchのみが編入されたということになるから、oldがその後それを修飾するためについたと説明できる。したがってそれが示す意味も「古い教会に行く人」ではなく、「年老いた教会礼拝者」もしくは「昔からよく教会に通っている人」を意味する(Roeper & Sigel 1979: 213)。

さらに一つの要素(語)しか編入することができないことから、2つ以上の要素が動詞の左側に編入された複合語は許されないということになる。つまりhandやputなどのように義務的に2つ以上の要素をとる動詞を利用した複合語は認められなくなる。(21)で示したように((19b)(19d)(19f)(19h)も参照)makeやsupportが必ずとる動詞句内の要素を含み、それが複合語に投射されなければならないからである。複合語(または接辞による派生)では構成する要素は、まず2つが結合して、その結果がまた別の要素と結合するというルールで作られているため、2つの項を主要部に同時に複合することができないのである。

- (24) hand toys to babies→*toy handing, *baby-handing
 put books on the table→*book-putting, *table-putting

(伊藤・杉岡 2002: 45)

この原理のもう一つの特徴は、動作主、道具、場所などを示す前置詞句が編入される場合には、前置詞が削除されるということである。

- (25) reared by wolves→wolfreared(狼に育てられた)
 knit with wool→wool-knit(毛糸に編まれた)
 made at home→homemade(自家製の)

(大石1988: 119)

動詞由来複合語の接辞に関してだが、-ed、-ing、-erのどの接辞がとられるかはその複合語が含む意味に反映されている。-edをとるものは受身の意味を含んでいる複合語に、-ingと-erはともに名詞を形成する。-ingをとるほうが生産性は高いといえるが、それは-erを含む複合語では「習慣性」という概念が含まれるからとも考えられる。

3.6.2 語根複合語

語根複合語では名詞+名詞の構造を持った複合語が一番多いが、先にも述べたように、語根複合語は動詞由来複合語と異なり、文を元に派生したものではないので、それぞれの語の繋がりには文法関係がない⁽⁸⁾。よってそこから生まれる意味もまた一つではなく動詞由来複合語に比べると解釈があいまいになる。多様な解釈が可能となるので規則性は低いといえる。以下では複合語(名詞+名詞)にはどのような相互関係が見られるかをまとめた。

(26) 名詞+名詞の複合語

- ①第一要素(非主要部)が第二要素(主要部)の動力になっているもの
windmill(風車)→the wind (powers) the mill
gas stove, wind-bell, motorcar, waterwheel...etc.
- ②第一要素が第二要素を生じさせるもの
bloodstain(血痕)→the blood (produces) stain
earthquake, sea wave, snowbank, weather stain...etc.
- ③第一要素が第二要素を所有する
doorknob(ドアの握手)→the door has a knob
sound wave, egg shell, taximeter, knife-edge...etc.
- ④第二要素が第一要素を生み出す
toy factory(おもちゃ工場)→the factory (produces) toys
sugar beet, music box, power plant, apple tree...etc.
- ⑤第二要素=第一要素
girl friend(女友達)→the friend is a girl
servant-girl, lady-help, manservant, boyscout...etc.
- ⑥第二要素は第一要素に似ている
frogman(潜水工作員)→the man is like a fog
cotton candy, globefish, zebra crossing, stone coal...etc.
- ⑦第二要素は第一要素からなる
snowflake(雪片)→the flake (consists of) snow
woodland, snowman, object, potato chip...etc.
- ⑧第二要素は第一要素のためにある
ashtray(灰皿)→the tray (is for) ash
price tag, racetrack, machine tool, consumption goods...etc.

(成田 1983: 143-145)

以上はすべて成田(1983)からの引用だが、竹井・桜井(1983)、竝木(1985)でもほぼ同じ分け方をしている。すると名詞+名詞の複合語の解釈は多様であるといえるが、ある程度の意味関係は限定できそうだ。

ところで上で挙げた例を見ていると2つのことに気がつく。一つ目はFabb(1998)でも指摘していることだが、構成要素の相互関係でsource(起点)となるものは見つけることができるが、goal(着点)となるものがないということである⁽⁹⁾。着点が含まれないのは動詞由来複合語においても同じである。先に挙げたchurch-goerは文の段階では確かにto~という着点を表す要素であるが、複合語になるとこの語は教会に向かって歩いている人ということは意味せず、習慣的に教会に通っている人のことを示し、この場合、発話時点で教会に向かっていのかどうかは重要ではない。しかしなぜこのような解釈になるかはまだよくわかっていない。

二つ目は(26)で挙げたように、名詞+名詞の複合語の相互関係は様々だが、一つ一つの複合語も様々な解釈を持つということだ。Plag (2003)ではchainsawが文脈によってはchainを切るためのsaw(のこぎり)と解釈されることがあるかもしれないと指摘している。また(26)①のwater

millは水車と訳してあるが、文脈によっては「水を作り出すひきうす」「水の近くにある製粉所」「人が水を飲むための製粉所」などというように多様な解釈も存在する。しかしながら、いくら解釈が多様であるといっても、不可能な解釈も存在する。Allen(1978)ではwater millは「水辺に住むひきうす」「水を飲むひきうす」「水から作られているひきうす」などの解釈は不可能であると指摘している。これは、ひきうす(あるいは「製粉所」)は無生物であり、住む、飲む、などの動詞は主語に生物主語を必要とするからである。つまり、それぞれの語には様々な解釈が存在するけれども、それらが組み合わされて複合語を形成するときには、語と語の意味的な相互関係、文脈によって決定されるといえる。

このようなAllenの指摘は、語根複合語であればほかの品詞の複合語にも有効であるように思われる。3.3でhomesickはsickの一種であると説明したが、語末にくる-sickは名詞と結びつき様々な解釈を発生させる。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| (27) a. brainsick (頭が変になった) | b. trainsick (電車で酔った) |
| heartsick (心を痛めている) | carsick (車酔いの) |
| ironsick (留め釘が腐っている) | sunsick (軽い日射病の) |
| watersick (水分の多すぎる) | lovesick (恋に悩む) |

(国廣・堀内 1999)

sickは形容詞なので、(27)の例は名詞+形容詞の複合形容詞である。(27a)と(27b)とは、要素の関係の違いで分類した。sickには「病気の」「気味悪い」「吐き気がする」といった多くの意味が存在するが、共通して「好ましくない状態」を示す形容詞であると考えることができる。しかしながら、-sickが名詞とともに複合語を形成されると各要素間の関係の違いが見て取れる。ここでは観察にとどまるが、(27a)ではsickな状態にあるものが複合語の第一要素であるのだが、(27b)では第一要素によって引き起こされたsickの状態を表していることを指摘しておきたい。これは、形容詞の下位範疇化の枠と複合語の関係について、さらに考察が可能であることを示している。

4. 終わりに

以上に見てきたように、語形成には多くのプロセスがある。3節から見てきたように、複合語は特に生産性の高いプロセスである。3.3で示したように、複合語形成には様々な制限が加えられている一方で、新聞や雑誌、インターネットなどで次々に新しい複合語が生まれている。つまり複合語は実生活においてもありふれていることがわかる。このことはおそらく、どの言語についても共通しているであろう。また外心複合語は各構成要素から推測される意味以外のことを示すことができるので、英語学習者にとっては厄介なものかも知れないが、それを使うことで長い説明をしなくてすむという利点があるので、英語話者には大変便利な言葉であるはずだ。

これからの研究の方向性としては、3.6.2で述べたように、複合語ではsource(起点)を表すものがあるが、goal(着点)を示すものがないが、なぜそのようなメカニズムになるのかをより深く探る必要がある。また外心複合語がなぜそのような意味を持つようになったのかということについても同じことが言える。

註

- (1) このプロセスは zero-suffixation, transposition などとも呼ばれる。
- (2) 動物の鳴き声などを文字化する場合は、既存の語とはまったく関係なしに生まれるものであり、そのプロセスは上のどれにも当てはまらない。
- (3) Laser pointer は pointer の一種であり、品詞も pointer と同じく名詞である。
- (4) 主要部の構成要素が、動詞+ing、動詞+er、動詞+ed の形をとっているもの。
- (5) Truck-man であれば、トラックを運転する(／修理する／売る…)人などの解釈が可能。
- (6) 下位範疇化の枠とは、ある語がどのような統語的環境に現れるかを示すもの。
- (7) 動詞の右側の要素だけが対象になるので、左側の主語が編入されて複合語を形成されることはない。
- (8) Roeper & Siegel(1978) では、語根複合語は動詞由来複合語とはまったく異なった方法で形成されると述べているが、Selkirk(1982) などではどちらも同じ方法で作られるという見方をしている。
- (9) ②は結果を表すものだが、着点とは別のものとする。

参考文献

- Allen, Margaret Reece. (1978) *Morphological investigation*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut. University Microfilms International.
- Fabb, Nigel. (1998) "Compounding" In: Spencer, Andrew, and Arnold M. Zwicky. (eds.) (1998) *The Handbook of Morphology*. Oxford: Blackwell, 66-83.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. (2002) 『語の仕組みと語形成』 東京: 研究社.
- 国廣哲彌・堀内克明(編). (1999) 『プログレッシブ英語逆引き辞書』 東京: 小学館.
- 竝木崇康. (1985) 『新英文法選書 2 語形成』 東京: 小学館.
- 成田義光. (1983) 『講座・学校英文法の基礎第一巻 発音・綴り・語形成』 東京: 研究社.
- 大石強. (1988) 『現代英語学シリーズ 形態論』 東京: 開拓社.
- Plag, Ingo. (2003) *Word-Formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roeper, Thomas, and Muffy E. A. Siegel. (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds." *Linguistic Inquiry* 9(2), 199-260.

(卒業論文指導教員 五十嵐海理)

Remarks on the interpretation of compounds in English

<Abstract>

Yo-ichi Arai

Classifying words according to their word-formation processes lets us know that there are many ways of forming English words: inflection, derivation, compounding and clipping, etc. Compounding is the most productive way among those processes. As a compound consists of two or more words, sometimes it is difficult to differentiate those from phrases. However, noticing lexicalization and differences of stress placement and testing whether these are governed by the morphological operations, enable us to distinguish them.

The structure of the compound is shown to be [[non-head]+[head]] combination with most compounds. This means that any constituent that appears before the head modifies it. And many compounds derive its meaning and character from its head. This character of compound is called "Right-hand Head Rule" and this is also available in Japanese word formation. However, not all compounds obey this rule; for example, *redcoat* and *cutthroat* don't obey the rule. These compounds only derive the morphological character from its head, but the head itself doesn't contribute meaning to the compound. *Redcoat* is not a kind of coat and *cutthroat* is not a kind of throat. The compounds that don't obey the rule are called "exocentric compounds" which include bahuvrihi compounds. By contrast, the compounds that obey the Right-hand Head Rule are called "endocentric compounds". Thus there are two kinds of compounds, exocentric compounds and endocentric compounds, the latter of which is more productive.

We can also divide compounds into two types in terms of how they are formed — verbal compounds and root compounds. Because a verbal compound contains a constituent derived from a verb, the meaning of the compound is predictable. The meaning of a root compound, however, is not predictable, as its constituents are not related to each other. That is, the interpretation of a root compound is dependent on the semantic features of its constituents and the context in which it is used.